



アサヒ エンジニアリング 株式会社

〒432-8001 静岡県浜松市中央区西山町1831番地の4
TEL(053)485-1000 FAX(053)485-3421 URL:<https://www.ash-eg.co.jp/>



アサヒ エンジニアリング 株式会社
ASAHI ENGINEERING

設立40周年記念誌

地上を見つめて地下を創り
生活と都市を守り続けた40年。



今までも、これからも。



旧社屋(1986年)

【40周年記念ロゴマークデザイン】

当社テーマ「地上を見つめて地下を創る」を40年継続してきたことを、数字デザインとカラーリングで表現、テーマを具体的業務に置き換え、「地下を創る=地下を掘る」→「地上生活へ豊かさをもたらす」イメージとしてビジュアル化しました。「40」の「4」横ラインを「地下のライフライン」に見立て、「40」の「0」を地上生活・暮らしを象徴する「建物」に見立てシンボリックにデザイン、地下から地上に向かうグリーングラデーションは、地下創造によりもたらされた豊かな地上生活を表現しています。なお本デザインは、候補3案の中から若手社員投票により最多票を獲得し決定したデザインです。

CONTENTS

〔目次〕

・アサヒエンジニアリング会長・社長挨拶	04
・須山建設 代表取締役会長×代表取締役社長寄稿	06
・歴史&データ ー1985年～1998年	08
・歴史&データ ー1999年～2012年	10
・歴史&データ ー2013年～2024年～	12
・黎明期を支えた4人の証言 「地中を拓く先駆者たち」	14
・新工法開発秘話／技術革新への飽くなき挑戦 「ユニコーンからレジェンドパイプ工法へ」	18
・新工法開発秘話／時代とニーズに最適解の技術開発を目指して 「環境に優しく、コスト削減もできるサクセスモール」	20
・管更生事業12年の軌跡 「専門技術を掘り下げ、ライフラインの未来へ貫通」	22
・受け継がれゆく技術と信頼 「アサヒの未来を拓く、中核社員からのメッセージ」	24
・若手社員突撃インタビュー	26
・フォトギャラリー／施工実績・社員旅行	28
・社員メッセージ	30



常に新たな挑戦を社員一丸となって進め、国内 有数の特殊専門工事会社を目指す

アサヒエンジニアリング株式会社は、須山建設株式会社主導のもと当時の三栄特殊工事株式会社の技術を継承する形で1985年に設立され、多くの皆様のご支援を得て本年40周年を迎えられましたこと深く感謝申し上げます。またここに40年の歩みとして記念誌を作成する運びとなり、関係された方々にお礼申し上げます。

私が須山建設に入社した45年前、入社当時のことはあまり覚えがありませんが、三栄特殊工事株式会社との事業継承の話があったかと記憶しております。新会社設立に当たりましては、今は亡き須山建設岡本最高顧問をリーダーとして、経理の大河内さん、初代社長の鹿島さん、技術の楠本さん、佐藤さんが中心となって進められました。その経緯は後述の苦労話をご覧くださいと思います。

私は秋山社長の後を引継ぐ形で8年前に社長を拝命し、現在は会長として1年目を向かえたところです。

当社の歴史的経緯と私が感じていることを述べてみます。

まず会社設立の時期を考えますと、先進各国に比べ遅れていた下水道事業に対し、多くの予算が国から配分され、成長する分野として先を見た岡本最高顧問の発案に感銘してます。設立初期の苦労された時期から後、引き継がれてきた泥水式推進工法を中心とした中大口径管路の施工にて、徐々に右肩上がりで成長を遂げていきます。一気に進められた下水道管路の本管工事は、やがて減少傾向に推移することが予想され、今後始まる枝線管路施工への対応として、須山建設・アサヒエンジニアリング共同で小口径塩ビ泥水式推進工法の開発を進めていくことになります。数年後には下水道新技術機構の審査証明を得て、ユニコーンDH-ES工法

が完成し、協会立上げと共に全国展開を図り今に至っております。こうした独自で開発した過程から得た技術と知識、関係協力会社が今の経営資源の基礎になっております。後に下水道普及率も大幅に上がり、売上高は17期には約30億を達成しております。しかしこのピーク時を境に大きな転換期を迎え減少傾向をたどり、社として暫く低迷した厳しい経営状況が続きました。

35期には須山建設の支援により新社屋が完成し、相乗効果が社員の意識に変化が見られてきます。また新入社員も増え始め社内の雰囲気も変化していったことは大きな財産になったと感じています。

今後の事業展開は、成熟したインフラ施設の老朽化対策に伴う修繕改築事業と、気象変動から増加する災害対策として防災関連事業を2大事業として、当社の既存技術を生かした取り組みと、新たな技術への挑戦が必要不可欠となります。時代の変化に伴う課題解決型事業を進める中で、また多くの方々の知恵とご協力をお借りし、常に新たな挑戦を社員一丸となって進め、国内有数の特殊専門工事会社を目指してまいります。

今後共皆様の変わらぬご指導とご鞭撻をお願い申し上げ、40周年記念のご挨拶とさせていただきます。

2025年2月、アサヒエンジニアリング株式会社は設立40周年を迎えることができました。これもひとえに今日の礎を築かれた歴代の社長、役員、社員の方々のご尽力と、須山建設本社を始め、関係する皆様方のご支援、ご協力の賜物と心より感謝申し上げます。

今回この40周年記念誌を制作するにあたり、会社設立時のメンバーにお話を伺ったり現役社員に苦労話を聞いて、改めてアサヒエンジニアリング40年の歩みを振り返ってみることができました。その道のりは決して平坦なものではなく、売上高のグラフにも表れているように激動の軌跡を辿ってきたことがわかります。アサヒエンジニアリングの売上の半分以上は県内での推進外注班の施工管理です。多くの推進工法を管理することで様々な条件の推進工事に対応し、発注者や元請けに的確な変更提案等ができることで県内のお客様から厚い信頼を得ています。一時期売上げが激減した後持ち直したのには、この県内の固い基盤をベースにいくつかのターニングポイントがあったからです。

一つ目は、売上げを伸ばしていくさ中、須山建設他2社とともに塩ビ泥水式掘進機を開発し、「ユニコーン塩ビ泥水推進工法研究会」（現ユニコーンES工法研究会）を立ち上げたことです。アサヒエンジニアリングがこの研究会の設立に携わることができたのは会社の大きな財産となりました。会員数は少ないものの全国の同業者とのつながりが生まれ、これが後にレジェンドパイプ工法協会誕生の伏線となります。

二つ目は管更生事業です。

2017年に光硬化工法協会に加盟、須山建設より市川係長（当時）がアサヒエンジニアリングに異動となると共に管更生機材、車両も移管され本格的にアサヒエンジニアリングの事業となりました。売上げは年々増えて、2023年度には全体売上の2割を占めるまでとなっています。

三つ目はレジェンドパイプ工法です。

東日本大震災後、地下水位低下工法によって液状化現象を抑制できないかと試験施工で試行錯誤を繰り返していたパイプメーカーのメイソマーク社、国土館大学の橋本教授、推進工事会社のアートコーポレーションとアサヒエンジニアリングが出会ってレジェンドパイプ工法協会が生まれました。アサヒエンジニアリングがユニコーンES工法研究会で培った協会の運営、積算、機械の開発、改良等の経験が生かされてできた協会であり、推進工法が防災減災分野で活用できる道を切り開いた出会いです。

ユニコーン塩ビ泥水推進工法研究会を立ち上げたことがレジェンドパイプ工法に繋がり、須山建設から移管された管更生工事が新たな柱となっています。地道な努力と出会いが事業継続の力になっていると感じます。これからも、先人たちが持っていたチャレンジスピリッツを継承し、地中のインフラ整備、更新、防災減災工事を通じて社会に貢献できる、また社員が生き生き働ける会社でいられるよう努力を続けていきたいと思います。



代表取締役会長
KINPARA HIDEAKI

金原秀明

既存技術を生かした取り組みと、新たな技術への挑戦が必要不可欠。



代表取締役社長
OKI TOSHIAKI

沖俊昭

地中のインフラ整備、更新、防災減災技術により人々の暮らしを支える。

アサヒエンジニアリング設立40周年を迎えて

アサヒエンジニアリング株式会社が40周年を迎えられることをお喜び申し上げます。

1985年に当時の須山建設の須山亮平社長、岡本彦一専務が中心になって、「上下水道が全国的に整備される時代となった。幹線となる大口径は大手中心の施工となるが、支線、枝線となる小口径管は地元業者が機械推進で施工する時代になる。小口径推進専門の全国展開できるサブコンを立ち上げよう。」という先見性ある経営方針により、経営責任者に鹿島満興さん、総務部長に大河内隆さんが選任されてスタートしました。当初は三栄特殊工事という会社を買収して事業を始めました。そして新会社は、昇る朝日のように成長していこうという意味を込めて「アサヒエンジニアリング」という社名になりました。鹿島さんが積極的な行動力と幅広い人脈で会社を引っ張り、移籍してきた楠本さん、佐藤さん達は専門工事業のエキスパートとして技術で信頼を守り、厳しい財務事情を大河内さんが支える形で始まりました。こうしてアサヒエンジニアリングは次第に業容を拡大していきましたが、何と言っても桜井製作所さんと共に泥水式塩ビ管推進機「ユニコーンDH-ES」を開発したことがエポックメイキングとなりました。須山グループとして全国組織に認定された建設機械の開発は初めてでした。この推進機によってアサヒエンジニアリングの全国展開が加速されました。日本推進技術協会から「黒瀬賞」という優秀技術賞をいただいて、私の父の亮平社長が大喜びしたのを覚えています。

アサヒエンジニアリング設立40周年記念誌寄稿

アサヒエンジニアリング株式会社設立40周年を心よりお祝い申し上げます。

この度、アサヒエンジニアリングの歴史を振り返る機会をいただき、技術開発型企業として創業し、創成期の社員の皆様の創意工夫によって推進工法の技術を確立されたことを知りました。ゼロからスタートし、最初の10年で売上20億円に到達するという急成長を遂げたことは、まさにベンチャー企業の成功例です。これだけの成果を上げるには、並大抵ではない努力があったものと推察します。諸先輩方の取り組みに深く敬意を表します。

「リスクを取って新工法の研究開発にチャレンジする精神」「全国展開を目指す営業マインド」「大学や全国各地の同業者との協業によるオープンな事業展開」など、アサヒエンジニアリングの企業文化には、グループ各社が学ぶべき点が多くあります。ゼロから事業を立ち上げてきた40年間の経験は、須山グループ全体にとって大切な財産です。

技術研究発表会やSPS発表会などでアサヒエンジニアリングの日頃の取り組みを伺う機会を、私自身、毎回とても楽しみにしています。グループ各社がアサヒエンジニアリングの取り組みから学ぶことが、須山グループ全体の新規事業開発力の向上に繋がっています。今後も、新規事業開発のリーディングカンパニーとして、グループ各社の模範となっていただくことを期待しています。須山建設も、アサヒエンジニアリングの挑戦に学び、新しいビジネスにチャレンジしていきます。

須山グループ全国展開の中核的な会社として50周年も、その先の発展も

それから約20年、ユニコーンを中心に様々な推進工法を施工できる能力を備えた県内随一の業者として時代の変化に対応しながら成長を続けたのは、アサヒエンジニアリングの経営者、社員の皆さんがひたむきに業務に取り組んでこられたからだと思います。しかし、上下水道整備の普及、人口減少、厳しい公共財政等の要因により従来の上下水道工事は今後も減少していくことが予想されます。これからは国土強靱化計画に基づいた防災、減災工事や管更生等のインフラメンテナンス工事の需要が大きくなっていくことが予想されます。こうした中で近年では新しい工法として「レジェンド工法」を開発して防災面から全国展開を図っていることは「エンジニア」という名前にふさわしい技術志向の会社であることの証しだと期待しております。

金原会長、沖社長、橋ヶ谷常務、高田部長を中心に現在は34名もの体制になったと伺っています。若い社員も入社して意欲的に仕事に取り組んでおられます。これからも須山グループ全国展開の中核的な会社として50周年を迎え、その先も発展されることを祈念しております。おめでとうございます。

下水道普及率は全国平均で80%を超え、新設の下水道工事は今後も減少していくことは間違いありません。しかし、下水道の更生・改築、上下水道の耐震化・液状化対策など、新しい社会課題が顕在化しています。この新しい課題こそが、ビジネスチャンスです。

新しい社会課題にまっすぐに向き合い、管更生事業やレジェンドパイプ工法など、様々な新事業に挑戦し続けるアサヒエンジニアリングには、創業の精神が今も息づいていると感じます。新しく入社した若い社員たちが創業の精神を大切に、新規事業を切り開いていくことが何よりも大切です。リスクを取って挑戦する姿勢が次世代に継承されていく限り、アサヒエンジニアリングの未来は明るいと確信しています。

これからも40年の積み重ねを十分に活かし、技術と人材への投資を続ける会社であり続けてほしいと願っています。アサヒエンジニアリングのさらなる発展と、社員の皆様の一層の活躍を祈念いたします。

須山建設株式会社 | 代表取締役会長

須山 宏造

SUYAMA KOZO

新工法開発による全国展開は「エンジニア」の名にふさわしい技術志向企業の証し。

須山建設株式会社 | 代表取締役社長

須山 雄造

SUYAMA YUZO

挑戦する姿勢が次世代に継承されていく限り、未来は明るいと確信。

1985-1998

設立目的は「技術開発」～革新的新工法誕生へ

アサヒエンジニアリングは、1985年に須山建設グループの中で推進工事を専門とし、さらに土木・建築の技術開発を目的とした会社として設立された。従来工法である刃口推進と共に小口径、中大口径機械推進工法を導入し、受注確保と施工管理充実に務めた後、設立目的でもある「技術開発」の結晶として1994年に須山建設を含む4社共同で塩ビ泥水式掘進機「ユニコーンDH-ES」を開発。革新的な新工法誕生により、地元浜松から全国へその評判が広まった。

1985年 [第1-2期]	土木・建築の技術開発を目的とした会社として設立	売上高(千円)／従業員数 土木・推進工事 66,506 6人  初代社長・鹿島満興	社会背景 青函トンネル貫通
1986年 [第3期]	従来工法と共に小口径機械推進工法、セミシールド工法を導入 本社所在地を浜松市西区西山町1831番地の4へ移転	土木・推進工事 751,853 6人  浜名幹線  浜名幹線  旧社屋	社会背景 チェルノブイリ原発事故
1987年 [第4期]	完成工事高は前期比98.1%増収、税引前利益は前期比56.3%の増益。	土木・推進工事 828,167 6人	社会背景 JR発足 天竜浜名湖鉄道開業
1988年 [第5期]	新推進機器の購入、新技術の開拓	土木・推進工事 1,043,635 7人	社会背景 日本初の屋根付き球場「東京ドーム」開業

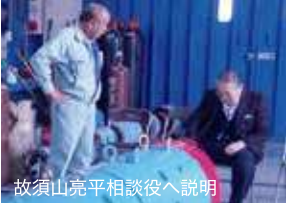
1990年 [第7期]	受注高鈍化、完成工事高は前期比6.1%の減収、税引前利益は前期比61.2%の減益  安全祈願祭(五社神社)	売上高(千円)／従業員数 土木・推進工事 1,129,013 9人	社会背景 湾岸戦争勃発
1993年 [第10期]	売上高 前期比37.9%の増収、税引前利益は前期比754.0%の増益	土木・推進工事 1,886,764 14人	社会背景 細川連立内閣成立 初のプロサッカーリーグ「Jリーグ」開幕
1994年 [第11期]	ユニコーンDH-ES工法開発・施工開始  ユニコーンDH-ES工法試験施工(ラサ工業)  ユニコーンDH-ES工法試験施工(ラサ工業)	土木・推進工事 2,034,589 15人	社会背景 製造物責任法成立
1996年 [第13期]	売上高は前期比1.8%の減収、税引前利益は前期比351.5%の大巾減益	土木・推進工事 2,360,314 21人	社会背景 住専問題発覚
1998年 [第15期]	公共工事は増勢も、工事採算の低下、資金調達難等、経営環境は一段と厳しさを増す	土木・推進工事 2,627,410 21人	社会背景 長野冬季五輪

1999-2012

推進工事ピーク到達～停滞期脱却へ次なる開発

国の下水道普及促進策の追い風に乗り、アサヒエンジニアリングは2000年に推進工事のピークを迎えた。
下水道の普及が進むにつれ工事の依頼が減少、翌年以降は売り上げが激減、その後「失われた10年」と呼ばれる停滞期に入った。
推進業界では受注競争激化で低コスト時代に入り、ますます技術力が問われる時代に突入。
会社設立目的でもあった「技術開発」に立ち返し、新たな活路・新規で新しい開発を目指していった。

● 1999年 [第16期]	ユニコーン塩ビ泥水推進工法 研究会設立  ユニコーンES工法研究会総会(故岡本会長) 	売上高(千円)／従業員数	社会背景
		土木・推進工事 2,925,380 20人	
● 2001年 [第18期]	ユニコーン塩ビ泥水推進工法研究会下水道展初出展	土木・推進工事 2,013,682 21人	老舗百貨店松菱破産
● 2004年 [第21期]	SPS・VE・改善活動を積極的に取り入れ、売上高は前期比6.6%減収も、税引前利益は前期比7.1%増益。	土木・推進工事 1,249,801 20人	新潟県中越地震発生
● 2005年 [第22期]	社長交代 SPS活動を基本に原価管理体制の見直し	土木・推進工事 1,250,663 20人 	愛知万博開催

● 2006年 [第23期]	サクセスモールw工法・開発開始	売上高(千円)／従業員数	社会背景
		土木・推進工事 1,122,389 19人	ライブドア事件
● 2007年 [第24期]	ユニコーンDH-ESR購入 日本推進技術協会 黒瀬賞受賞 	土木・推進工事 1,099,811 23人	食品偽装問題発覚
● 2008年 [第25期]	サクセスモールw φ500 φ300購入、工法導入  	土木・推進工事 1,540,432 22人	リーマン・ショック
● 2009年 [第26期]	ユニコーンDH-ES静岡県に新技術登録	土木・推進工事 1,005,654 23人	鳩山民主党に政権交代 浜松モザイカルチャー 開催
● 2011年 [第28期]	EA21取得 産廃収集運搬許可取得	土木・推進工事 1,141,680 22人	東日本大地震発生
● 2012年 [第29期]	ユニコーンDH-ES長距離化 	土木・推進工事 1,021,773 22人 	ロンドン五輪 衆院選自民圧勝 政権奪還

2013-2024~

管更生事業開始～新工法「レジェンド」誕生

老朽化する下水道管が急激に増加していく状況の中で大幅な需要増が見込まれている管更生事業を2013年より開始。
2018年には、会社設立以来培ってきた推進工事の技術を活用して新たな地下水位低下工法「レジェンドパイプ工法」を産学官共同で開発。
北海道胆振東部地震や熊本地震による液状化被害のあった地域で2020年から施工を行っている。
今後被災した地域の復興や、ハザードマップで被害が予想されている地域の事前防災対策にも大いに貢献できると考えている。

2013年 [第30期]	管更生事業開始	売上高(千円)／従業員数	社会背景
		土木・推進工事 947,782 26人	アベノミクス始動 特定秘密保護法成立
2014年 [第31期]	サクセルモールφ450購入	土木・推進工事 1,097,531 23人 社員旅行一大阪	浜名湖花博2014開催 消費税8%に引き上げ
2015年 [第32期]	ユニコーンES工法研究会に改称 	土木・推進工事 1,109,845 25人 社員旅行一東京・横浜	イスラム過激派テロ多発 安全保障関連法成立
2016年 [第33期]	社長交代 許可業種追加  	土木・推進工事 1,138,825 25人  社員旅行一金沢 	熊本地震発生

2018年
[第35期]

レジェンドパイプ工法協会設立

- ・横浜北西線施工
- ・新社屋竣工



2019年
[第36期]

- ・レジェンドパイプ工法 篠原で試験施工実施
- ・清水インターチェンジパイプルーフ施工



2020年
[第37期]

レジェンドパイプ工法実施工開始



2022年
[第39期]

- レジェンドパイプ工法NETIS登録
- ユニコーンES工法研究会ハイウェイテクノフェア初出展
- 焼津インターチェンジ施工

2023年
[第40期]

- 八王子排水管施工
- Re-パイプシステム工法協会入会

2024年
[第41期]

- 社長交代



売上高(千円)／従業員数	社会背景
建設事業 1,210,696 25人 社員旅行一北海道 	米朝初首脳会談 財務省が森友文書改ざん
建設事業 1,290,569 29人 社員旅行一沖縄 	平成天皇退位・ 「令和」に改元 消費税10%に引き上げ
建設事業 1,657,408 30人	コロナ感染拡大 東京五輪延期 安倍首相辞任
建設事業 1,493,857 35人	安倍元首相銃撃 サッカーW杯ベスト16
建設事業 1,582,888 35人	イスラエルガザ侵攻 WBC優勝 大谷メジャー本塁打王
 第4代社長・沖 俊昭 社員旅行一宮崎・鹿児島 	石川・能登半島地震発生 トランプ候補大統領再選 大谷Wシリーズ制覇

地中を拓く先駆者たち

～黎明期を支えた4人の証言～

アサヒエンジニアリングは、創業より独自の技術開発力とチャレンジ精神で業界内の地位を確立し続けてきた歴史があります。そこで、創業時のメンバーにお集まりいただき、当時の苦労話や会社の歩みについて語っていただきました。

鹿島 満興

KASHIMA MITSUOKI

1985年(第1期)～2004年(第21期)代表取締役社長
2005年(第22期)～2008年(第25期)代表取締役会長

大河内 隆

OHKOUCHI TAKASHI

1985年 須山建設より出向し総務部長として入社
1995年(第12期)～2015年(第32期)監査役
2016年(第33期)～2022年(第39期)取締役

楠本 敬

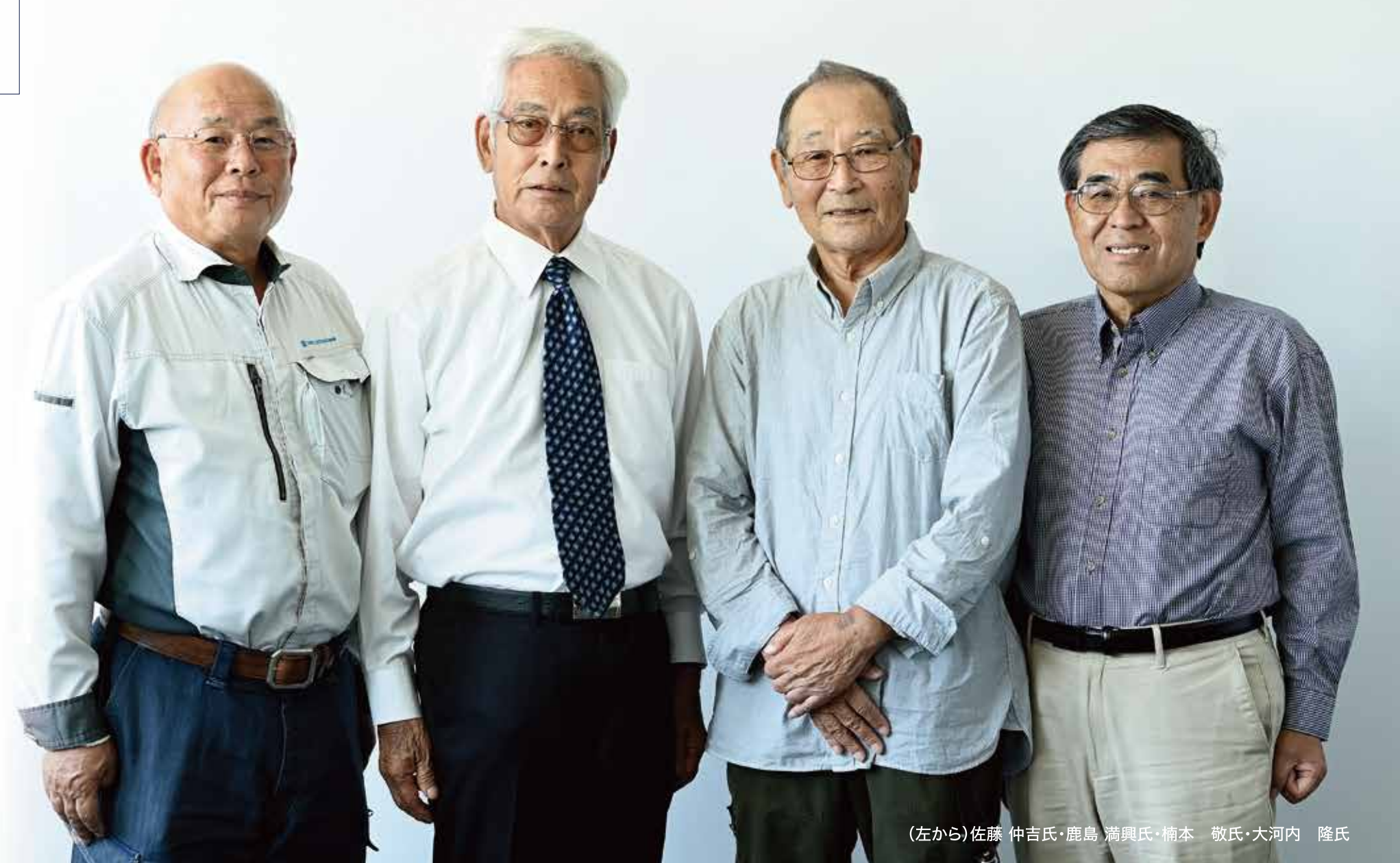
KUSUMOTO TAKASHI

1985年(第1期)～2004年(第21期)取締役

佐藤 仲吉

SATO NAKAKICHI

1985年入社
2002年(第19期)～2013年(第30期)取締役



(左から)佐藤 仲吉氏・鹿島 満興氏・楠本 敬氏・大河内 隆氏

朝日が昇るような 将来性のある会社を目指して

鹿島 アサヒエンジニアリングは、1985年に須山建設グループ内の推進工事の専門工事業者として設立されました。その前身は、須山建設の出資会社で三栄特殊工事株式会社という推進工事業者です。当時、その会社の経営状況があまり良くなかったため、私と大河内君がその会社に派遣されて立て直しを図ったんです。

大河内 その頃、私は須山建設の経理畑にいたんですが、突然「来週から別の会社に行ってほしい」と言われ、晴天の霹靂でした。三栄特殊工事株式会社では、財務的な問題が色々発生していたため、本業に影響が出ないようにと、新会社を設立することになったんです。社名は、当時の故・岡本彦一取締役が、電話帳の掲載順が上になるように「A」や「あ」が付く社名がいいとのこと

で、朝日が昇るような将来性のある会社になろうと「アサヒエンジニアリング」に決めました。



楠本 当時の事務所は、建設現場の事務所として使われているような、5m×2m程度のプレハブ小屋でしたよね。ストーブと扇風機があるだけの狭い部屋だったな。

鹿島 そう、そのプレハブ小屋からアサヒは大きくなっていったんです。創業当初は、大河内君のついでに山形や秋田方面を回り、人材獲得に奔走しました。そうして得た作業の方々が我々と同じ気持ちで身を



粉にして働いてくださり、同時に新しい技術開発にも取り組んできた結果、成長を遂げることができたように思います。

大河内 最初の頃は会社としての体制もまだ確立されていなかったし、下請け業者も少なく苦労しましたが、受注力はあったため徐々に経営が軌道に乗り、3期目には黒字化を果たすことができました。私は設立時から専任で2年間在籍しましたが、黒字化して「さあ、これからだ！」と勢いづいたところで本社に戻られてしまい、残念だったな。でも、立ち上げ時に商法や会社法、債権や

時効のことなどを体で覚えられたので、その経験がその後も様々な場面で役立ちました。今ではこんなに立派な事務所になって、こんな話ができるようになるとは夢にも思わなかったので、感慨深いです。

佐藤 私はこのメンバーの中で一番の若手で、当時はまだ30代だったんですよ。この業界に入る前は銀行員だったので、一級・二級土木施工管理技士や推進工事技師の資格を取るのに実務経験が余計に必要で、時間も長くかかったし、勉強も大変でした。仕事自体も本当に忙しくて、毎日夜1時すぎまで働いて、翌朝7時に起きてまた現場へ行くという状況が何年か続きましたが、それでも不思議と辛いとは思いませんでした。それはきっと、日本で5本の指に入る推進業者になるのを目標に、皆が一丸となって頑張っていたからでしょうね。

営業活動と推進工事で全国津々浦々へ

鹿島 当時は、国内で行ったことのない都市は数カ所しかなく、営業で全国津々浦々の役場を回りました。「自社開発の機械で日本全国を制する」



という目標を掲げて必死に営業活動が続けていたんです。

楠本 私も工事で全国を走り回っていましたね。まだ若くて体力もあったので、北海道から沖縄まで、仕事があればどこへでも行きました。会社のお金で全国旅行をしたようなものですよ(笑)。特に、沖縄に3年間赴任した頃のことは今でも鮮明に記憶に残っています。当時の沖縄は、米軍の統治下に置かれていた時代の名残で、車道が右側通行だったんですよ。嘉手納基地内の現場に入る際も、簡易的なパスポートを持っていないと仕事ができない状況でした。慌ただしい毎日を送る中で、一番思い出に残っているのは、鹿島社長からのポケットベル。やたらにベルが鳴って、その度に公衆電話を探さないといけなかったんです。やっとの思いで電話をすると、「今から帰るから」と、大した用事じゃないことが多くて、それには悩まされました(笑)。



地中を拓く先駆者たち

鹿島 クス(楠本)さんがどうしているか気になって、わざとやったんだよ(笑)。

楠本 まあ、当時はこんな感じで、上司と部下でありながらも言いたいことは何でも言い合えたり、自分がやりたいことは何でもやらせてもらったので、ありがたいと思っています。

大河内 そうでしたね。でも、みんなが全国各地を回っていたので、私はいつも事務所にボツンと一人でいる状況でしたよ(笑)。

自社開発の機械で 人力から機械化へ

楠本 沖縄は、本土とは土質が全然違って、琉球石灰岩の上に砂が積もっているような地質だったんです。地盤が硬いうえに、当時は刃口推

度ありますが、開発ができるほど財力のある会社は少ないんですよ。そこは須山建設のバックアップのおかげもありますが、国から建設技術審査証明を取得するなど、常に自社開発において地道な努力を続けてきたことが他社との差別化に繋がりました。

大河内 そういえば当時、8ビットパソコンで本社と同じシステムを作ろうと挑戦したこともありでしたね。けっこう優れたシステムが出来上がり、販売する話も持ち上がったんですが、結果的にはパソコンの言語を作っている会社が潰れてしまって駄目になりました。当時、楠本さんは8ビットパソコンを利用して見積もりシステムも作りましたよね。

楠本 そうでしたね。8ビットパソコンは今のパソコンに比べると非常に陳腐なものですが、とにかくどうしたら見積もりがラクにできるだろうかと試行錯誤して作った覚えがあります。あの頃は大変だったけど、面白かった。何でも挑戦させてもらえる環境が良かったんですよ。そうでなかったら今日のアサヒはなかったと思うし、それが強みじゃないかな。

創業以来培われてきた アサヒの強み

鹿島 私が思うアサヒの強みは、業界から好かれていたことだと思います。だからこそ、仕事もたくさん回ってきたんですよ。その期待に応えようと必死に働いたので、周りの人たちから、「たったこれだけの従業員数で、なぜ30億円もの仕事ができるのか」とよく言われたものです。

楠本 当時は特に準大手ゼネコンとのお付き合いが多く、各社の所長さんが転勤で他の地域へ赴任すると、赴任先で推進工事の案件がある度に、当社に声を掛けてくれたんです。そのおかげで全国のどこへ行っても会社の認知度が高かったですね。そういう人と人との繋がりで、

会社が大きくなっていったのだと思います。

鹿島 ゼネコンが下請け会社を選ぶときは、総務がしっかりしているかを必ず見極めるんですよ。当社の場合は大河内君が総務部門をしっかり統括してくれていたからこそ、ゼネコンからの信頼を勝ち得たのだと思います。もちろん須山建設が母体であることも大きいですがね。

大河内 須山グループ内の他社は須山建設の事業部を分社化した会社ですが、アサヒは1からスタートした会社である点が大きな違いであり、そこからアサヒの独自性がはぐくまれたのではないかと思います。

佐藤 それに、アサヒは創業当初から負けず嫌いでしたよね。他の会社に負けたくないという気持ちが特に強かったと思います。

楠本 当時はそれが当たり前で、「やってやるうじゃないか」という気概に溢れていましたね。

鹿島 岩盤が管を突き抜けても、押して、押して、押しまくる。そんなパワーがありましたよね。営業的には、他社が音を上げた案件をあえて探し歩くようなこともしていました。とにかく「ネヴァーギブアップ」、これが設立以来変わらぬ合言葉ですよ。

楠本 本音はギブアップしたかったですけどね(笑)。

世界のアサヒになってもらいたい。やろうと思えば必ずできる。常に新しいことにチャレンジする姿勢は忘れないでほしい。

佐藤 体が弱ければギブアップしていたんですが、あいにく健康で強かったもんだから、何とかもっちゃったという感じです(笑)。

これからの時代を担う 後輩たちへのメッセージ

鹿島 これからのアサヒを担う皆さんにお伝えしたいのは、世界のアサヒになってもらいたい。やろうと思えば必ずできるということです。

大河内 私たちの経験が、今の若い世代の参考になれば嬉しいです。

楠本 最近では下水の普及率も上がってきているので、推進工事を伸ばすのであれば少し視点を変えて、他社にない新たな技術を模索するといいいんじゃないかなと私は思います。

歴代社長40周年特別寄稿

“ネヴァーギブアップ”の精神で皆一丸となった日々

この度は、アサヒエンジニアリング株式会社の設立40周年、おめでとうございます。

この「アサヒ」という社名は、朝日はどんなことがあるうといつでも昇って来るという所から、アサヒエンジニアリングと、須山亮平社長と岡本彦一専務より名付けられました。

私がアサヒエンジニアリング株式会社の設立を命ぜられたのは1985年で、須山建設から大河内隆氏を総務部長として迎え、楠本 敬氏、佐藤伸吉氏の少人数で、海のものとも山のものともわからない所からの出発でした。しかし、社員、協力会社からは、なんだか期待されていました。皆、休日もなく、家族からは見放されるほどに朝から夜まで死に物狂いで働きました。

推進業界は次第に大きな変化を迎え、1994年当社は、下水道管敷設工事に使う泥水式塩化ビニール管推進機の改良機「ユニコーンDH-ES」を開発しました。従来機より掘削能力が高く、一回に掘り進む長さも三割伸びました。この機械の製作は、桜井製作所にお願ひしました。これによりコスト削減と工期短縮につながるメリットがあると、国交省の外郭団体「財団法人下水道新技術推進機構」の新技術認定を受け、販売を始めました。

その後も、“ネヴァーギブアップ”の精神で皆一丸となり、事故もなく北海道から沖縄まで、いろいろな土地でその土地の業者様の力も借り、順調に会社は伸びていきました。皆、文句ひとつ言わずに頑張り抜き、本当にアサヒエンジニアリングという会社を立ち上げて良かったなと思いました。

私は退職しましたが、その後を引き継いでくださった皆様のがんばりで、会社が繁栄している事、大変嬉しい限りです。これからの、益々の発展を心からお祈り申し上げます。誠に、40周年おめでとうございます。

働きやすく誇りが持てる職場づくりを目指して

アサヒエンジニアリング株式会社の設立40周年、おめでとうございます。

在任当時、冊子に掲載されたコメントを記載させていただきます。

企業経営において『CSR(Corporate Social Responsibility)＝企業の社会的責任』への取り組みに対する関心が高まっています。解釈は色々あるようで経済同友会は企業が社会の持続的発展に貢献し、同時に価値創造や競争力が向上するものとしているが、会社が税金をたくさん納めることがCSRと言う学者もいるそうです。具体的な取組みはコンプライアンス(法令順守)や企業倫理の向上を取り上げる企業が多く、ステークホルダー(消費者、取引先、株主)からの信頼を大切にする姿勢が求められています。世評は耐震強度偽装事件、落札率の高い工事は談合であるとか建設業界に対する見方、評価の尺度が大変厳しくなっており益々ユーザーや世間に対する高い倫理性と責任ある行動が不可欠になってきます。又働きやすく誇りが持てる職場づくりを目指していきます。須山グループの方針である「お客様に喜ばれる仕事をしよう」が正にそれであると思います。格差社会に成りつつあると言われますがグループ総合力で勝ち組になれるよう頑張りましょう。(2006年5月号いざんより一部抜粋)



設立初代 代表取締役社長
鹿島 満興氏



二代目 代表取締役社長
秋山 泰雄氏

技術革新への飽くなき挑戦

～ユニコーンからレジェンドパイプ工法へ～

推進工事の技術革新を牽引してきたアサヒエンジニアリング。

1992年に開発を始めた小口径泥水式推進工法「ユニコーン」は、業界に新たな可能性を開いた。

2018年にはその技術を活かして「レジェンドパイプ工法」を開発。

さらに管更生事業へと展開を広げ、常に技術革新の最前線を走り続けている。

開発に携わった技術担当の小島と営業担当の橋ヶ谷が語った開発秘話からみえてくるのは、当社に根付くチャレンジ精神だ。

画期的新工法の開発

1992年、下水道工事が幹線から枝線へと移行し始めた時期に、アサヒエンジニアリングは画期的な技術開発に着手した。当時、枝線工事に使用される塩ビ管は開削工法かオーガ式での施工が一般的だったが、地下水位が高い地域では地盤沈下のリスクが避けられなかった。当社はこの課題を解決するため、親会社の須山建設、ラサ工業、工作機械メーカーとの4社連携で、小口径泥水式推進工法の開発に挑んだのである。

しかし、複雑な泥水システムを小口径に収まるように小型化するのは至難の技。開発には幾多の困難が待ち受けていた。「当時の施工機や図面を見ると、作っては改良し、作っては改良しと、何度も変更している跡があり、相当苦労したことがわかります」と小島は語る。

試行錯誤を重ねた末、1994年に目標性能を備えた「ユニコーン

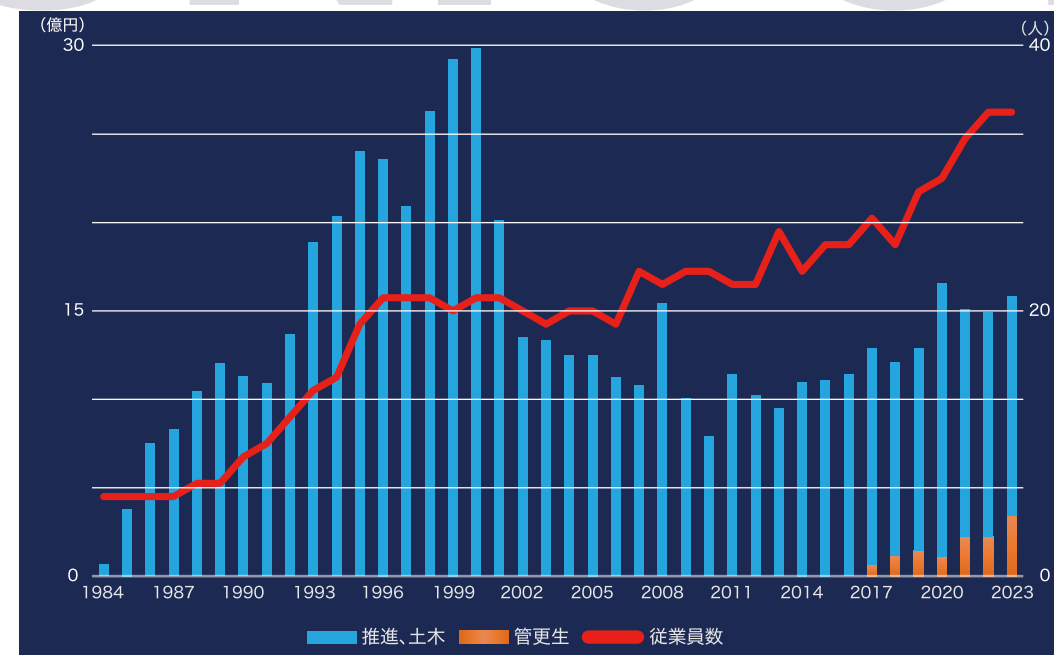
DH-ES」がついに完成。地元・浜松から全国へと評判が広がり、1999年には下水道新技術推進機構の技術審査証明を取得。2007年に日本推進技術協会の黒瀬賞も受賞している。

その後、礫層対応の面板開発にも成功し、地下水が多い砂質地盤から礫質地盤まで対応可能な万能機として評価を確立していった。「数億円の投資をする決断は、下水道工事が右肩上がり伸びるという確かな見通しがあったからこそ成し得たこと。今思えば、先輩方のその着眼点は素晴らしいかと思います」と小島は振り返る。



失われた10年からの脱却

国の下水道普及促進策の追い風に乗り、当社は2000年に推進工事のピークを迎えた。しかし、下水道の普及が進むにつれ工事の依頼が減少し、翌年以降は売り上げが激減。その後の10年は「失われた10年」と呼ばれる停滞期に突入した。各市町村からの発注工事をこなす仕事が減少していく中で、新たな活路を見出す必要に迫られていた。営業の橋ヶ谷は、「どこかの会社が始めたことに便乗するのではなく、当社が新規で新しい開発を始めない限り商売にならないということを痛感していました。過去にはユニ



コーンという素晴らしい機械を開発したのだから、必ず何かできるはずだと思い、模索する日々が続きました」と当時を振り返る。

転機は、2018年に訪れた。東日本大震災後の液状化対策として推進工法が使用されているという情報を得た橋ヶ谷は、同業者や大学の研究者との共同開発に参画。国土交通省の新技術開発補助金に応募し、見事採択された。「まさか採択されるとは思っていませんでした。それが大学の先生から『すごいことになりました!』と連絡があり、大騒ぎになったんです。その後、先々を見越して協会組織を作ることにしました」レジェンドパイプ工法は、ユニコーン工法がベースとなっている。しかし、開発には想定以上の困難が待ち受けていた。「補助金の申請時に、100%可能かどうかわからないようなことも盛り込んで提案したんです。それを実現するのは本当に大変でした」と小島。開発費用も補助金の2,000万円では到底足りず、追加で1,000万円以上の自社投資を行ったが、その先見性は的中した。

特に画期的だったのは、小口径管でのリターン機能の実現だった。従来は不可能とされていたこの技術を、持ち前の技術力で克服。ユニコーンで培った小口径泥水技術が、この革新的な機能の実現を可能にしたのである。

三事業を基軸に、さらなる革新へ

現在、レジェンドパイプ工法は国土交通省が推奨する液状化対策工法の一つとして認定され、全国から注目を集めている。当初5社でスタートした協会は現在26社にまで成長し、毎月のように技術委員会や専門部会が開催されている。「協会運営が成り立っているのは、事務局も試験施工開発も担う実力があり、人材も揃っているアサヒエンジニアリン

グあつてのこと」と、業界からの評価も高い。

近年の地震の頻発により、防災対策としての需要はさらに高まっている。「すべての地域を対象とするのは難しいですが、『選択と集中』で、どうしても液状化させられない都市部や、緊急輸送路として重要な幹線だけでも、レジェンドパイプ工法によって対策を施す必要があります」と橋ヶ谷は指摘する。また、会社全体としては、推進工事と防災工事に管更生を加えた三事業をバランスよく展開することで、リスクの分散を図っている。小島は、「管更生は今後10年、20年は需要があると思いますが、その次の時代に向けて、新しいことを考えていかなければなりません。当社はユニコーンとレジェンドパイプのどちらの協会も運営しているので信頼度が高く、新しい話をいただける機会も多いので、当社の技術を活かせる新しい分野は必ずあると思います」と、さらなる革新への意欲をみせる。

ユニコーンから始まり、レジェンドパイプ工法へ、そして管更生事業へと、アサヒエンジニアリングは常に時代の要請を先取りしながら、技術革新を続けてきた。かつては競争相手だった企業とも協力関係を築き、業界全体の発展に貢献する...それこそが、アサヒエンジニアリングの真骨頂といえるだろう。創業から40年、その挑戦は新たな段階へと進んでいる。



時代とニーズに最適解の 技術開発を目指して

～環境に優しく、コスト削減もできるサクセスモール～

時代とともに、常に推進工事の技術革新を追求し続けてきたアサヒエンジニアリング。

環境保全とコスト削減を目指し、より広範囲の土質に対応できる

小口径泥土圧式(吸引排土)の「サクセスモール ω 工法」をジオリード協会、ラサ工業とともに開発した。

完成までに2年を要して開発された新工法は当社の切り札になると期待された。

小口径掘進機に厳しい天竜川流域の土質

アサヒエンジニアリングのある浜松市の東側には、度重なる氾濫によって「暴れ天竜」と呼ばれた天竜川が流れている。

天竜川は諏訪湖を水源として流れ出し、中央アルプス、南アルプスを抜け、遠州平野と呼ばれる沖積平野を形成した。この沖積平野には天竜川によって運ばれた中央アルプスや南アルプス由来の花崗岩、マイロナイト等様々な岩石が堆積している。下水道の幹線の整備が終わり面整備に移行する中で、これら硬質で径が300mmから400mmもある岩石の点在する層を小口径掘進機で長距離、曲線施工をする必要に迫られた。

また、時代的には建設事業における産業廃棄物の増加が問題となり、推進工事においても排出される泥水分量の削減が課題となっていた。こうした課題を解決すべく動き出したのが2006年のことである。

開発期間2年、初期投資2億円の「サクセスモール ω 工法」

さっそく、当社の創立メンバーの一人である佐藤が中心となり、ジオリード協会、ラサ工業との共同開発が始まった。ラサ工業は泥土圧式



の「ユニコーンD」という工法を保有していたが、吸引排土で礫の多い現場だと配管が詰まりやすいという欠点があった。それを解消したのが「サクセスモール ω 工法」だ。

「ユニコーンD」をベースに改良を重ね、いかに礫の多い土質でも石が詰まらず、小口径でもスムーズに掘進できるか試行錯誤を重ねた。「掘進機の一番後ろにタンクを設置し、排土を一旦ストックする方法を考え、何度もシミュレーションを行い、形になるまでに2年かかりました」と佐藤は振り返る。

2008年に製品が完成し、最初に現場で使用したのは榊原だ。初めて触る機械なので手順がわからず、新しい機械ならではのクセを掴むまでが大変だった。500mmの口径で1.2m押すごとに油圧ホースを切



り離してつなげていく工程の中で、ホースの切り方の順序を間違えると油圧モーターに負荷がかかり、ギアのカバーが変形して破裂したこともあったそう。「問題点が出てくるたびに佐藤さんにフィードバックして、改良してもらうことの繰り返しでした」と榊原は語る。

環境に優しく、コストも抑えられる工法

「サクセスモール ω 工法」の強みは、巨礫、転石にも対応し、長距離曲線施工にも可能な機械で設計コストも軽減できること。また、掘削した土砂を連続土砂分級装置(マスターR)により土砂と泥水に分級することで循環再利用が可能となり、建設汚泥排出量を80%削減できることである。

2014年に入社して以来「サクセスモール ω 工法」だけを操作してきた渡邊は、「砂礫層でも玉石層でも安定した掘削が可能で、ジャイロナビ

システムで高精度の曲線推進ができます。諸先輩が苦勞して開発してくれたおかげで、質の高いパフォーマンスができます」と語る。

時代の変化に対応する

全国的に下水道の普及率が上がってきた現在、残された現場は難易度の高いところが多い。今後も環境に配慮しつつ、顧客のニーズ、時代のニーズに対応できる更なる能力を備えた工法の開発が必須である。サクセスモール ω 工法で得られた知見を活用し、アサヒエンジニアリングの未来への挑戦は続いてゆく。



～管更生事業12年の軌跡～

専門技術を掘り下げ、ライフラインの未来へ貫通

アサヒエンジニアリングの管更生部門が歩んできた12年の道のりは、技術革新と人材確保の積み重ねだ。

推進工事を主力としてきた会社が、いかにして新たな分野に挑戦し、成長を遂げてきたのか。

管更生部門のスタッフ5人に取材し、その軌跡をたどった。

工営部
渡辺 英利
WATANABE HIDETOSHI

工営部
河合 隼
KAWAI HAYATO

工営課長
市川 悠
ICHIKAWA YU

工営部
高田 充浩
TAKADA MITSUHIRO

工営部
野嶋 佳考
NOJIMA YOSHITAKA



アサヒエンジニアリングの管更生事業は、2002年に須山建設が管更生の光硬化工法に参入したことから始まる。その後、須山建設は2011年に管更生の施工権を取得。当時同社で現場監督を務めていた市川が管更生部門を担当することになった。

2017年には事業の移行を踏まえ、アサヒエンジニアリングが光硬化工法協会に加入。市川が当社へ転籍すると同時に、当社での管更生事業がスタート。浜松市中央区入野町や静岡市での工事を皮切りに、事業を拡大して行った。

技術の研鑽と新たな設備の積極導入

しかし、新規事業の立ち上げには多くの困難が伴った。「管更生の事業は社内での認知度が低く、私以外に事業内容を詳しく知る人間がいなかったため、営業や見積もり、工事管理の一切を自ら担い、部門を仕切っていくしかありませんでした」と市川。推進工事部門から管更生部門に転属になった渡辺も、「最初は何をしたいのかもわからず戸惑いま



した。でも、とりあえずやってみるしかなかったのが、現場で1から管更生を学びました」と回想する。

スタート当初は、5人体制で事業に着手。どの現場でも工事車両が最低5台は必要なため、一人でも欠員があると工事ができない状態が3年間ほど続いた。しかし、人手不足の状況下でも地道に技術の研鑽に努め、光硬化の開発を手がける東京の東亜グラウト工業などの現場を見学し、新たな技術を習得。同時に、高圧洗浄機やTVカメラ車、削孔機といった新たな設備も導入していった。

その結果、管更生の部門は2020年頃から全社の売り上げに大きく貢献するようになる。2021年には、ヤマハ発動機からの工事依頼を初受注。翌2022年には、部門として初の新卒社員・河合隼を迎えた。「3年目の今でもまだまだ知らないことばかりですが、いずれは一人前の技術者として現場を任される存在になりたいです」と語る河合は、



2024年初頭、市川とともに能登半島地震の被災地へ赴き、下水管の被害状況調査を体験。ライフラインを守ることの重要性を身をもって体験し、仕事に対する使命感を改めて認識したという。

高度な技術と丁寧な施工で得た信頼と実績

光硬化工法は、重機を使って管を入れ替える工事に比べて効率が良く、工事がしづらい現場でも容易に管更生が行えるのが特徴だ。アサヒエンジニアリングは、この工法における技術の高さと丁寧な施工によって、業界から高い評価を得るようになった。「管更生は材料費が高額で、失敗すると大損害に繋がるため、工事には大きな緊張感を伴います。ですから、これまでの経験をもとに、頭の中でシミュレーションを事前に何度も繰り返してから、実際の工事に臨んでいます」と語る渡辺。それだけに、工事が無事に終わったときの達成感は格別だ。



ライフラインを守るという達成感と使命感

管更生部門の要としてチームを統括してきた市川は、「振り返ってみると、この仕事をやっていて良かったと思うことの方が多いです。専門性が高いゆえに技術を掘り下げることにやりがいを感じるし、関連業者や同業他社との仲間意識も強いから」と語る。売上高とともに、社内全体の完工高における同部門の割合も年々向上し、今後は会社の未来を担う部門として、技術力のさらなる向上に努めるとともに、若い人材の確保や、工事を手掛ける班を増やしていく考えだ。アサヒエンジニアリングの管更生事業は、困難を乗り越え、着実に成長を遂げてきた。その背後には、社員たちの熱意と技術力がある。彼らの努力は、単なる事業の成功だけでなく、社会のライフラインを守るという重要な使命を果たすことに繋がっている。今後も管更生のプロフェッショナル集団として、社会のニーズに応え続けていくことだろう。



～受け継がれゆく技術と信頼～

アサヒの未来を拓く、中核社員からのメッセージ

創業期から20年以上かけて、アサヒエンジニアリングの中核を担ってきた社員たち。

厳しい時代を乗り越え、現在の会社の要となる彼らが受け継いできた技術と精神、そして次世代への想いを語った。

会社初の新卒社員として歩んだ道

1989年に会社初の新卒社員として入社しました。当時は社員が5、6人という小規模な組織でしたが、その1年後には当社が初めて元請けで下水工事を担うなど、着実に実績を重ねていきました。当時は繁忙期が8月から12月に集中し、その時期だけでも十分に利益を出せる力がありました。深夜まで働くこともありましたが、皆で協力しながら乗り越えてきました。繁忙期30年以上を経た今、推進工事の精度が上がって技術力も向上し、組織自体も成長しましたが、大切なのは「仕事を楽しむ心」です。創業以来の堅実な企業姿勢と温厚な社風を受け継ぎながら、一人一人が責任を持って楽しく仕事をすれば、会社の未来は明るいと確信しています。【高田 宜幸】



現場で実際に働きながら技術を習得。最盛期には7、8か所の現場を同時に担当し、現場を車で回るだけで1日が終わる日々が続きました。現場では苦労も多かったですが、作業員さんたちと和気藹々と工事を進め、到達時の喜びを皆で分かち合える楽しさもありました。2011年に営業部に異動してからは関東方面への営業展開を担当。飛び込み営業の日々は本当に大変で、心が折れまくった覚えがあります。今後は、私たちのこうした経験に新しい発想を加え、会社の未来を拓いていきたいと思います。【榎原 力】

和やかな社風が心の支えに

高校に募集が来ていたのがきっかけで当社を志望しましたが、たまたま親が会社の幹部と顔見知りで、面接時に幹部と親が話をして入社が決まりました。現場を担当するようになってからは月に9,000キロも車を走らせ、給与と同額の車両手当を受け取ることもありました。現場でのトラブル処理は骨が折れますが、それでも仕事自体を大変だと感じたことはありません。社内の雰囲気が常に和やかであることが、心の支えに



なっています。また、大きな仕事を任されるようになってからは、先輩方から得た教訓に救われたことが度々ありました。若い社員の方々も、私たちが先輩方から学んだ基本を土台にして、さらに新しいことにチャレンジしてほしいです。【今坂 幸生】

将来を見据えた会社づくりを推進

1996年の就職氷河期に入社し、入社2年目から全国各地の現場を担当。元請けと下請けの間を取り持つ役割を担いました。当時は仕事に自家用車を使っていたのですが、移動があまりに多いので、新車なのに走行距離が2年間で10万キロになったときにはショックでしたね（笑）。とはいえ、当時は社員も職人さんも同世代の方が非常に多かったため、皆で飲みに行く機会も多く、仕事もオフも充実していました。かつては推進工事の将来性に不安がありましたが、現在は新たな分野にも着手し、事業の幅が広がりつつあります。今後も若い世代の方々が将来に不安を感じることはないように、10年20年先を見据えた会社づくりをして



いくことが重要だと考えています。【小島 功】

オリジナルの積算システムを継承

須山建設の土木部で現場監督を務めていた関係で当社に出向。期間は4年程度と聞いていましたが、いつの間にか24年が経ちました。当初の配属は工事部でしたが、2001年に営業部門に移り、元社員の故・古田達栄氏が構築した「推進工事に特化した積算システム」を引き継ぐことに。最初の1年は覚えるのに苦労しましたが、積算のおかげで数字的な側面から現場をみられるようになり、設計会社や行政の方々とも交流が生まれ、徐々に仕事楽しくなっていました。下水道工事の減少期には県外への営業開拓に奔走し、同業他社との協力関係の強化に努めました。これまで培ってきた技術と信頼を糧に、今後も常に新しいことに挑戦する企業であり続けたいです。【橋ヶ谷 直之】



到達時の達成感を分かち合う喜び

1993年に協力会社から出向、2000年に正社員になり、直営班で中大口径の推進現場を担当しました。当時は仕事を見て覚えるのが基本で、

常務取締役

橋ヶ谷 直之

HASHIGAYA NAOYUKI

工営部係長

今坂 幸生

IMASAKA SACHIO

営業部課長

小島 功

KOJIMA ISAO

工営部係長

榎原 力

SAKAKIHARA TSUTOMU

取締役 工営部部長

高田 宜幸

TAKADA YOSHIYUKI

40年も続く会社の
一員になれたのは
誇らしいです



留目
哲彰

TODOME TETSUAKI

施工管理が担当です。下請けさんと元請さんの間を取り持つて工程を組んだり、工事が安全に滞りなく進むよう、サポートする役割を与えてもらっています。最近ハマっているものですか？ YouTubeでホラー系の動画を観ることでですね。寝る前に、部屋を真っ暗にして。仕事にはないスリルや刺激を手軽に味わえるところに、おもしろさを感じています。

長い歴史を持つ
会社に、これから
貢献していきたい



河合
隼

KAWAI HAYATO

高校生の頃やっていたサーフィンで、最近また再開しました。入社して3年が経ち、精神的に余裕が出てきたからかも。と言っても、去年は初めて現場代理人を任せてもらって、四苦八苦してましたけど(笑)。でもサーフィンも仕事も、できないことができるようになる達成感はすごく好きですね。まだまだ新人なので、これから会社に貢献できるよう頑張りたいです。

自分が**魅力的**に
感じる仕事をできる
よるこび



鈴木
公隆

SUZUKI KIMITAKA

前職は他社で推進工事をしていましたが、その部署が潰れてしまい、どうしてもこの仕事がしたくてアサヒエンジニアリングに転職してきました。入社を後押ししてくれた上司や、快く受け入れてくださった社長や会社には、すごく感謝しています。この仕事は、道路の下や山の中を掘り進めて、土質など未知のものが明らかになっていく過程が魅力的ですね。ずっと続けたいと思っています。

いろんな人に出会う、
変化に富んだ毎日と
仕事の**達成感**



佐藤
省吾

SATO SHOGO

自分で段取りして、現場を動かして行って、単純作業じゃなく、毎日が変化に富んでいる。終わったときとの達成感はなんとも言えないですね。作業員の方々は年上の方ばかりなので、とにかくコミュニケーションを大切にしています。現場ごとにいろいろな人に出会えるのも魅力のひとつ。もともと機械科出身ですが、この会社を選んでよかったです。

アサヒエンジニアリング若手社員 突撃インタビュー

最近の趣味、印象に残っている出来事、会社のよさや仕事のおもしろさ、
40周年について思うことなど、自由なテーマで若手社員に語ってもらいました。

今後の未来を
担う若手社員！
頼むぞー



役職に関係なく、
誰とでもフレンドリーに
接してくれる**社風**

原田
善英

HARADA YOSHIHIDE

入社してすぐ先輩や上司に「若いうちはとにかく遊べ」とアドバイスをもらいました。その教えに従い、これまでたくさん遊んでみましたが、人より楽しく生きられているとは思もの、全くお金が貯まらないので、ちょっと失敗したなと(笑)。そういう風に、役職に関係なく、誰にでもフレンドリーに接してくれるのは、この会社のいいところですね。



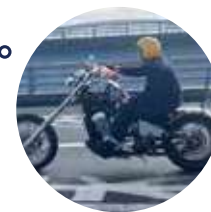
若い人の意見
を取り入れてくれる
会社です

中山
幹太

NAKAYAMA KANTA

もともと他社への就職を考えていたのですが、アサヒエンジニアリングへ見学に来た際に、色々と融通を利かせてくれそうだし、若い人の意見を取り入れてくれそうだと感じて、入社を決めました。その予感は当たっていました。僕の適性を抜いてくれたのかは正直わかりませんが、入社1年で工事から営業部に転属になり、この仕事が好きだなと感じています。

古いものに愛着が湧く。
これからの**仕事**が
楽しみです



疋田
凜

HIKIDA RIN

働きはじめて、おかげさまでお金を好きなことに使える余裕ができて、好きだったヴィンテージのバイクや車を買いました。最新の車種とちがい、古い機械は壊れるのが僕は好きで、直したりするので愛着が持てる。仕事はまだ未熟ですけど、オンオフがしっかりしてるのがこの会社のよさかなと思います。これからいろんな現場で仕事できるのも楽しみです。

新しいことにチャレンジ
する部署で、**歴史**を
つくる一員になりたい



鳥羽山
季杜

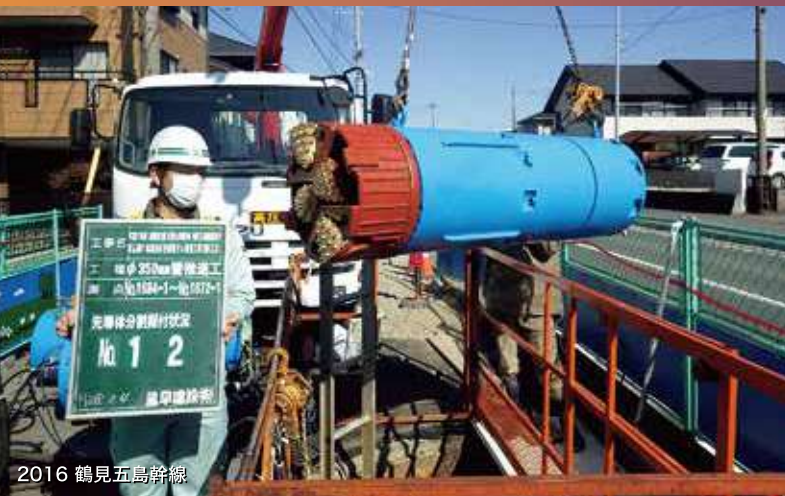
TOBAYAMA KITO

今年から新設された企画課に配属になりました。ウォーターロードパイプのような、これから推進していく事業が多く、僕はもちろん、会社もまだまだ手探りの状態ですが、新しいことへのチャレンジにとってもやりがいを感じています。50周年、60周年を迎えたとき、自分は40周年からいるんだぞと、胸を張って言えるようになりたいですね。

数多くの現場、課題に 挑み続けた40年

施工実績

様々な工法・技術、数多くの現場で積み上げられた経験値・知見を駆使し、課題・難問に挑みクリアし続けた40年。
ここに掲載された足跡は確かな礎となり、この先の未来も挑み続ける。



社員旅行

2014 大阪



2015 東京・横浜



2017 福岡・長崎



2018 北海道



2024 宮崎・鹿児島



後10年くらい
はがんばります
今田幸生

和気あいあいとした雰囲気
困っている人がいたら
率先して助ける会社
大石 三正

大勢の仲間が信頼する指導役
防災・減災対策工事の
高度技術の蓄集地に！
古田 若二

人生、楽ありや苦もあつた
元氣があらはに可なり
渡辺 圭一

1級土木施工管理技士
を取得し大きな仕事を
任されるようになりたい
留目 哲彰

みんな
笑顔
高田 宜幸

ケかのないよう
野嶋 佳孝

地中のインフラ建造・更新・
防災・減災技術のスペシャリスト
があるから会社に！
沖 俊昭

会社設立40周年おめでとう
ございます。
今後の会社の発展を社員
として支えていく事を楽
しみにしています。
高田 亮治

新しい資格を取得して
現場で活躍する
佐藤 希吾

会社設立40周年
おめでとうございます。
いっしょに成長し続ける
会社で働いて楽しいです。
高田 亮治

日々勉強
日々成長
米澤 亮太

Mes sage

from All-staff

日本を飛び出て世界
に進出する。
3系と楽しく日々を過ごす。
川口 純男

会社の重なる成長
のために今後も頑張る
行きます。
伊藤 暢基

長く続けるよう
体力を付けて
仕事をします
藤田

その世界で
No.1
高田 明

管更生のレジェンドに
オレはなる!!!!
渡辺 英利

次の未来・100 周年を目指して

アサヒエンジニアリング

スタッフメッセージ

「自分の足跡を残す」
「可愛いおばあちゃん」
★山本 明子★

積算をバリバリ
できるように頑張って
役に立つ人になりたい
営業部 吉永 理沙

提案から積算現場まで
全てを熟知する！
営業部 中山 幹太

健康を維持して
働く
村田

目指せ 金庫
50周年 50億
祝賀会
出席します

自分の未来
一人で現場で
びきりやうになっている。
石川 真

日々の感謝
鈴木 仁隆

真心を持って誠意を
尽くし信頼を保つ。
「着実に努力せよ」
佐藤 伸吾

一級土木士取得し
会社に貢献できるよう
頑張ります。
河合 真

40周年おめでとうございます
機材のB種
管更生チーム2班体制の確立
その道のプロフェッショナルを目指す
市川 悠

防災・減災対策 防災
公共工事のスタンダード
にあってほしい
小島 功

今後とも市の総力を結集して
さらなる
技術向上・技術開発で
アサヒエンジニアリングを
推進し続けよう
鈴木 秀弘

諦めずに最後まで
やり切る！
原田 喜栄

オールラウンダーになりたい
野村 勉一

推進工事技士の
資格を取る
鳥羽 山季杜

全都道府県で
仕事する
渡辺 立希

老害注意！
峯 浩